参　　考

１　村むらの新田開発

江戸時代のくらしはすべて米が基準であった。領主は百姓が納める米の年貢（税金）で政治を行った。

当時地方の領主は参勤交代などで経費が嵩むことが多かったので、農民に田畑を開墾させて年貢の増大をはかった。農民はそのため原野を切り開いて田や畑をつくり、新しく溜池や用水路をつくった。このようなことを開田、新田開発、開墾と云った。

江戸時代中頃以後の村は、井出村・北田村・大谷村・上繁岡村・下繁岡村・波倉村・山田岡村・山田浜村・前原村・下小塙村・上小塙村の 11 か村であった。これらの村々は開田をすすめているが記録によると次の通りである。

繁岡新田　上繁岡村　延宝３年（1651）
松が岡新田　上繁岡村　延宝４年（1652）
細戸新田　山田岡村　明暦３年（1657）
立石新田　上繁岡村　寛文８年（1668）
黒石新田　大谷村　寛文 10 年（1670）
仁平蔵新田　大谷村　元禄 10 年（1697）
乙次郎新田　大谷村　元禄 13 年（1700）
夫太郎新田　上小塙村　宝永２年（1705）
所布新田　井出村　宝永７年（1710）
開田面積などの記録は少ない。

これらの新田は上田・中田・下田に分けられ年貢高が決められた。当時の収穫高（反・10 アール当り）は

上田　１石５斗（約１６０kg）
中田　１石２斗（約１２０kg）
下田　１石以下（約　９０kg）であった。

五公五民といって収穫の半分は年貢として納められた。

開田や畑の開墾は現代も続けられているが、繁岡地区は明治に入って開発され、営団（下繁岡）・女平（上小塙）・大阪（山田岡）は第２次世界大戦中から戦後にかけて食料増産のため開発された。